

読書の手段としての索引

—「仏像一心と形」索引作成の一事例—

Book Indexing as a Tool for Reading —A Report of an
Indexing Experiment to *Butsuzo-kokoro to katachi* as a Text—

井 上 如
Hitoshi Inoue

Résumé

Butsuzo-kokoro to katachi (Buddhist statues; the mind and form) by Mochizuki, Sawa and Umehara was tentatively indexed to identify the uses of book indexing as a tool for reading and understanding of the text. Four functions of indexing: verifying tool, stimuli for new ideas, aid for text analysis, and identification of reading processes are tested and reviewed. Though book indexing may be useful so long as the indexing policy is articulate and well fitted to the actual purposes of text reading, generalization and standardization of book indexing techniques are necessary before we can distil the uses of book indexing as a tool for text reading.

- I. 読書の手段としての索引の問題点
 - A. 発見か検証か
 - B. 手段としての索引の吟味
 - C. 読解のプロセスとしての索引
 - D. 語彙のピックアップと意味の理解
 - E. 索引のための読書と読書のための索引
- II. 対象文献と索引作業の段取り
 - A. 対象文献
 - B. 本書を取り上げたいきさつ
 - C. 索引作業の段取り
- III. 分析視点の設定と索引方針
 - A. 方針設定のジレンマ
 - B. イコノグラフィーのドキュメンテーション
 - C. “かたち”と“こころ”
 - D. 著者別の検討

井上 如：東京大学情報図書館学研究センター助教授

Hitoshi Inoue, Associate Professor, Research Institute for Library and Information Science, Tokyo University.

読書の手段としての索引

- E. ほとけどうしのあいだから
- F. 仏像事例
- IV. 索引作業の技術上の問題と解析表の作成
 - A. 索引技術上の問題
 - B. 索引作成上の方針
 - C. 解析表の構造
- V. 分析視点をめぐる索引結果
 - A. “かたち”と“ところ”
 - B. 著者別の特徴
 - C. ほとけどうしの相互関係
 - D. 仏像事例
- VI. 結論—読書の手段としての索引—
 - A. 索引方針の手段化
 - B. 索引作業の方針設定の重要性
 - C. ワードとコンセプト
 - D. 読解のプロセスとしての索引
- VII. あとがき

I. 読書の手段としての索引の問題点

A. 発見か検証か

読者が文献を読むための手段として索引作業を行う際の問題の第一点は、読み取るべきことは始めからわかっていて、いわばそれを計量的に確認するために索引してみるのか、あるいは、普通の読書の時に読んでいったのでは決して発見することのできない何かを、索引作りという地道な積み上げ作業によってあらわにしようとしているのか、という点である。これは目的の設定という問題である。

例えば、ある文献の著者がどのくらい国際的視野に立ってテーマを取り扱っているかを吟味するために、その書物の中に出て来る外国の地名、外国人の氏名の種類と出現頻度、出現場所のバラエティを調べて見たという場合、国際的視野に立っていることと、外国の地名、人名の使用は相関するという前提に立って作業を行うのが前者である。

反対に、インデックスのことを日本語で“索隠”と書き表わすように、他の手段では明らかにならぬことや、直観ではわからぬ何かを白日のもとにさらすことがねらいであるとすればそれは後者である。

B. 手段としての索引の吟味

索引を使って読み取った結果が、すでにわかっている

ことの計量的実証であれ、新発見であれ、その対象とした文献を読解する以外に知ることが出来ない内容のことであつたかどうかを検討の主たる対象ではない。これは視点の設定という問題である。おそらく、その文献からしか読み取れなかったということはほとんどなくて、結果的には、むしろ他の文献を普通に読んだ時の方が、早く正確に理解できる内容のことがらが大部分だという場合もあろう。問題は、その同じことを、索引を手段としてその文献から読み取る索引技術の面に主たる関心がそそがれる。それがどのような索引技術であるかを主たる検討の対象とする。

これから対象とする『仏像一心とかたち—』という文献は、3人の著者の手になる宗教関係の教養書である。読んでみると、読書の常として、そこで著者達が述べていることとは異なる解釈をしたいという気持ちがわいて来る。ここは著者達の方が間違っているのではないかと思われる点が出て来る。しかし、たとえ結果がそうした著者達とは異なる観方の発見ということにたまたまなったとしても、吟味しなければならぬのは、やはりそこに至るプロセスでの索引作業の方である。

C. 読解のプロセスとしての索引

読書の手段としての索引を、その索引作業によって対象とした文献への理解が深まり、読書を次のステップへと展開していくための一つのプロセスとしてとらえる。

これは範囲の設定という問題である。索引ができあがって、それで終りというのではなく、それは1ステップが終了したのであって、その結果そこから次のステップがいろいろ明らかになって来る。新発見であれ、実証であれ、索引結果の検討は、結果としてよりも、むしろ次のステップのための手がかりと見るのが、読書的手段としての索引の場合は現実的ではない。

この考え方を応用していくと、一つの文献に対して、その読みの深さに応じて幾通りもの索引があり得ることになる。ところが読みの深さは、人によって異なり、同一人でもその索引のたびごとに異なるであろう。すると、出版された書物の巻末についている内容索引も、そのうちの一つが形象化したものだけということになる。

D. 語彙のピックアップと意味の理解

文献の索引をしていて、テキスト中のある語彙を、それが頻繁に出現するからとか、あるいは、内容を具体的にピンポイントするのに適切なテクニカル・タームだからという理由で、とにかく索引項目として拾っておいて、さてその意味はと考えると、実はぜんぜんわかっていないということがおこる。索引作業が進行すればするほど意味取り意識はうすれ、内容に対し盲目になり、ピックアップが終了してから考えてみて始めて気付く。語彙は処理したが、さて意味はとなればそこでまた辞書が必要となる。内容を具体的にピンポイントするのに適切なテクニカル・タームなどと判断しておきながら意味を知らぬタームを拾っている。文脈の中にある時はわかったのに、文脈を外して改めて眺めるとわかっていない。これは、字拾いと意味取りの乖離という問題である。

『仏像一心とかたち一』では、“慈悲”という語が出て来る。こうした用語を見ると、仏教語辞典で1度チェックすることが実は必要になる。それが仏教のテクニカル・タームであるのかないか。そして“慈悲”はもちろん仏教用語である。このようにある用語がいつけん一般的で、しかし実はテクニカルなタームだということを、ピックアップが終了してから気付くということは、そこまでのプロセスでそうしたボーダーライン上の用語を大量に見落してきたということである。索引作業というものは、索引項目の選定という部分が重要な役割を果すが、その選定の基準として用語の専門性のみを安易に過大評価すると、それは読書的手段としての索引の場合は、結果に大きな影響をおよぼすのではないか。

意味はよくわからないが、とにかくテクニカル・タームだから、ということで拾うと、あとで文脈を外れたそ

のタームの意味は全くわからなくなる一方で、専門用語でない語句が重要な意味を持って使われていることを読み進んでから気付く。この字拾いと意味取りの乖離という問題を実際に確認する必要がある。

E. 索引のための読書と読書のための索引

索引は、一般には文献を探すための手がかりであると理解されている。その際、文献に対して索引をつける場合にはその文献を読まねばならぬものとされている。文献を読んでその文献の内容を表現するために、分類したり、件名を付与したり、抄録を書いたりするが、いずれにしる、これらの作業を行うのには、まずその文献を読まねばならぬとされている。この場合に文献を読むことは、索引や抄録を作成するための手段である。

今回の作業は、この目的と手段を入れ替える試みである。観方を変えれば、読者とインデクサーの立場を同一人で兼ねてみようという試みでもある。索引を作るために文献を読むという場合は、たとえ潜在的にしる、その文献の読者は別に存在して、インデクサーはそうした読者集団に対するサービスとして、その文献をアプローチ可能にするという作業をしている。つまり、インデクサーがその文献の最終読者ではない。それに対して、読書的手段としての索引は、その読者が、上記のインデクサーと類似の索引作業を行うかもしれないが、それはあくまでも手段であって、索引作業を行う当の本人が、その文献の最終読者であることにはかわりがない。

自分で作った索引に自分でユーザーになるとはどうか。それを確認する過程で上記の諸問題はどのように展開するか。次に『仏像一心とかたち一』の索引を試みることによって具体的に検討することにする。

II. 対象文献と索引作業の段取り

A. 対象文献

対象文献として次を選んだ。

望月信成、佐和隆研、梅原猛共著『仏像一心とかたち一』
日本放送出版協会、昭40.2冊(NHKブックス20,30)

著者の紹介として巻末に次のように記載されている。

望月信成(もちづき・しんじょう)

1899年 京都に生まれる

1926年 東京大学文学部美学、美術史科卒

現在 京都博物館鑑査員、大阪市立美術館主事を
経て、同館長。その間大阪市立大学教授を

第1表 章別に見た小見出し, グラフ, 行の量

章名	ページ数	小見出し数			パラグラフと行数						写真・図の数			
		かたち	ところ	計	かたち		ところ		計		かたち	ところ	計	
					パラグラフ	行	パラグラフ	行	パラグラフ	行				
上	仏像のころ ^{*1}	9	5	5					9	191	0	0	0	
	仏像の誕生—釈迦如来像	28	6	7	13	22	213	28	261	50	474	7	2	9
	現世利益の仏—薬師如来像	28	8	8	16	37	285	21	212	58	497	9	0	9
	彼岸への憧憬—阿弥陀如来像	31	7	10	17	19	243	30	269	49	512	11	0	11
	絶対の探求—大日如来像	31	7	9	16	35	250	30	293	65	543	6	2	8
卷	変化の仏—観音菩薩像	36	11	9	20	56	373	26	258	82	631	11	0	11
	路傍の仏—地藏菩薩像	27	6	8	14	18	198	25	255	43	453	8	1	9
小計		(190)	(45)	(51)	(101)	(187)	(1,562)	(160)	(1,548)	(356)	(3,251)	(52)	(5)	(57)
下	未来の仏—弥勒菩薩像	30	7	8	15	25	250	26	235	51	485	10	0	10
	さまざまな菩薩—普賢, 文殊, 虚空蔵菩薩像	19	7	2	9	33	256	9	57	42	313	8	0	8
	忿怒のほとけ—不動明王像	32	11	9	20	41	297	26	203	67	600	15	1	16
	武神と福神—諸天像	36	12	10	22	42	248	24	245	66	493	17	2	19
	地獄・極楽—地獄・極楽図	31	7	11	18	23	271	29	248	52	489	9	1	10
卷	禅の世界—達磨像	32	10	10	20	30	290	33	227	63	517	9	0	9
	曼荼羅で見る日本精神史 ^{*2}	10		5	5					18	162	0	0	0
小計		(190)	(54)	(50)	(109)	(194)	(1,612)	(147)	(1,215)	(359)	(2,827)	(68)	(4)	(72)
総計		380	99	101	210	381	3,174	307	2,763	715	6,078	120	9	129

*1, *2 序章と終章は, かたちとところに分かれていないため, それぞれの縦軸の集計には含めていない。(執筆: 梅原)

III. 分析視点の設定と索引方針

A. 方針設定のジレンマ

索引方針がきまらなければ索引作業に入れない。一方で, 索引作業そのものをやってみないうちは, 特定文献を対象とした具体的な索引方針は作れない。この意味では索引作業が完了した時に, 初めて索引方針ができるということになる。従って何度も索引して見る必要がある。回数を重ねるほどよくなるはずだ。

抽象的な表現の索引方針, 例えば, 項目の採録を決める時に,

- ただ1回の出現でも, まとめて扱われていて, しかも, 目次や小見出しからではつかめぬもの
- テキスト全体を通じて何か所にも分かれて高頻度に出て来るもの
- 逆に, 1か所に1回しか出て来ないものは固有名詞も含めて落とす

などとしても使用に耐えない。対象文献のテーマやスタイルや文脈をふまえていないからである。しかし, 対象文献のテーマやスタイルや文脈をふまえても(通読すればそれはある程度つかめる), なお困難がある。用語の使われ方, 内容の展開とテクニカル・タームの出現の関係などはテキストを読んだのでは理解できない。

この基本的矛盾に解決策はないから1度通読して分析視点を定め, それに対して当面の索引方針をたててみる以外にない。以下に示すのは, 1度通読して自分の関心を再確認した段階での分析視点と, それにともなう索引方針である。

B. イコングラフイーのドキュメンテーション

通読してすぐわかることは, イコングラフイーを担当した佐和, 望月は, 経典と儀軌と曼荼羅をふまえたドキュメンテーションに徹しているということだ。いま対象としている仏象がこれ等の資料の中でどう扱われているか, より authentic なイコングラフイーをこれらの資

読書の手段としての索引

料の中に確認しようとしている。対象は仏像のイコノグラフィーであり、それは歴史的な流れの中で追求されるべきものであるが、そのためには、仏像そのものを歴史的に配列し直すよりも、これら資料に準拠する方が適切だと佐和、望月は見る。仏像は、その製作年代に諸説あり、しかも、失われたものが多い。それならむしろ、經典や儀軌や、曼荼羅の歴史的配列を重視しようとする。

このイコノグラフィーのドキュメンテーションをつかむための手がかりとして、經典、儀軌、曼荼羅等のソースをすべて索引項目に拾うことにする。

C. “かたち”と“こころ”

本書が仏像のイコノグラフィーと、その思想的解釈から成る本であることは、通読しなくてもおよその見当はつくとして、通読してみても、もう一つ解ることは、各章とも、まず佐和か望月が“かたち”を示し、それに対して梅原が“こころ”を示すという順序になっているのだが、あとから語る梅原は、必ずしも佐和、望月が出した材料の全てをふまえて自分の論を展開している訳ではないという点である。それと同時に、佐和、望月の提出しなかった材料も時には加えている。つまり、取り扱い範囲が、“かたち”と“こころ”で完全に一致している訳ではない。

読んでいて興味をひかれるのは、どの点では、“かたち”の著者と“こころ”の著者はかみ合い、どの点では行きちがいがいになっているかという点である。

そこで、両方の著者の論がかみ合っている部分が抽出できるような項目の拾い方をすること、これを第2の方針として立てる。これは、単に注意して項目を拾うということばかりでなく、“かたち”の著者と“こころ”の著者の記述部分における項目の一致を求めるという作業をとまなうことになる。

D. 著者別の検討

本書の一つの特色は、“かたち”のところを2人の著者、“こころ”のところをまたもう1人の別の著者ということで、同一人が“かたち”と“こころ”の両方を書くということをしていない。読み進んでいて興味をひかれるもう一つのことは、佐和、望月が前述のようなドキュメンテーションを重視しているのに対し、梅原が、そのイコノグラフィーの思想的解釈にあたって、視野を拓げ主として西欧文明との比較において論じているという点である。そこで、梅原が“かたち”のあとを受けて“こころ”を語る方法として、どのような枠組みを用意した

か、それが索引項目としてどのように表われてくるかということ調べてみることにする。

E. ほとけどうしのあいだから

本書の更にもう一つの大きな特徴は、第1表にも示したように、ほとけを種類別に分け、それぞれのほとけごとに章を立てるという構成になっているという点である。この構成に従って本書を読み進んでいるうちにわいて来るもう一つの興味は、しからば各ほとけどうしの関係はどうなのかという点である。仮にこの同じ『仏像一心とかたち』というテーマを取り扱っても、それを時代別に整理したり、ヨーロッパや、インド・中国・日本の違いとしてまとめたり、主な寺院別に観光案内を兼ねてという取り扱い方もあり得た。本書は、図像学的区分に従った章立てだが、一方でこれらの仏はお互いに須弥壇を構成する仲間である。イコノグラフィーはともかくとして、“こころ”の面で各ほとけのつながりはどうなるのか。

それをつかむために、各章毎に扱われたほとけたちが、他の章でどう出現して来るかを拾うということにした。

F. 仏像事例

本書はNHKのテレビ番組“仏像一かたちとこころ”を書物にしたものである。このことは、本書を読む場合にも、索引する場合にも参考になる。まず視覚に訴えて“かたち”を見、“かたち”を眺めながら“こころ”に関する話を聞く。その名残りが129枚の写真の取り扱いにも、うかがえる。本書を読み進むにつれてわいて来るもう一つの関心は、そのテレビ番組を見なかったこともあって、また、初めに本書を選択することになったいきさつもあって、そこに上げられた代表的仏像事例は、自分の眼でたしかめたいという点である。さいわい、代表的仏像は、写真とともに所蔵している寺院や博物館が示されている。

そこで、内容的な吟味からはいささか外れるが、それらをほぼもうら的に拾っておくこととする。

IV. 索引作業の技術上の問題と解析表の作成

A. 索引技術上の問題

索引技術上の問題は、一般的に論ずることが可能であるが、その解決策はできるだけ具体的であることが望ましい。以下に、問題の性質とその原因をまず述べる。

1. 問題の性質

索引技術上の問題は大きく分けて二つあり、その特徴は、その両者が矛盾するために解決が困難になるというところにある。

問題の第1は、索引作業を行う際に、項目の拾い方に首尾一貫性 (consistency) を持たせるということである。索引作業は実務的なものであり、そこには経験主義の欠点が出やすい。索引作業の比較的始めの段階で項目として立てておいたことがはっきりしているタームに出会うと、そこでのテキスト中の取り扱いに関係なく再録し易く、逆に、初めて出現した語だと、重要なものでも拾わないということになり易い。このようになる理由は、索引者が同時に注意しなければならぬ項目数には一定の限度があり、その限度数に達すると、新しく出現して来る語を採録することに reluctant になる。遂には、そうした新しいタームの存在に気付かぬようにすらなる。その結果、最終的に索引に採録した語の種類が、書物の前半ぐらいで出つくしてしまい、後半はただその再出現をチェックしただけということにさえなりかねない。

問題の第2は、大きな項目の見落としである。第1ページから行っていく作業が実務的であるため、内容の細目におたって注意する方向にだけ意識が行き易い。これがページが進むにつれて、ますますその傾向が強くなる。その結果、何ページにもわたる重要なポイントを見落とししてしまう。こうしたポイントに目を配るのには、ページからページへの進行をしばらくおいて、前の方をふり返ってみるという操作が必要であるが、実際にはなかなか困難である。

二つの問題とも、一つ一つはさして解決のむずかしい問題ではないが、実際やってみると困難を感じる。それは、この両者の解決のために必要な注意力が、基本的に矛盾する性質を持っているためではないかと思われる。ページにまたがってかかっている重要な項目を拾おうとすれば、もっと小さい単位で出て来る、前から拾って来ていた項目を見落とししてしまうし、字拾いに首尾一貫性を持たせようとすれば大きな項目は目次からぐらいしか拾えない。この解決策には、どちらにもバランスよく注意するなどということに済まぬ何か方策が必要である。

2. 問題の原因

問題がこのように矛盾する二つの点から成り立っていること背景には、その根本的な原因として、文章というものがリニャーな情報の展開だという事実があると思われる。

言語による情報伝達の欠点を、言語の持つ抽象性と、意味のあいまいさに認める傾向があるが、これらはどちらもその欠点であるよりも長所であることの面がはるかに重要である。言語による情報伝達のおそらくもっとも具合の悪い点は、このリニャーな展開の方にある。『仏像一心とかたち』の場合、上下合わせて本文380ページというものは、1回フォローするのに1日かかる。しかし1日かかることそれ自体よりも、それが第1ページからリニャーに見て行かざるを得ないということの方にこそ問題がある。しかし、文章の持つこのリニャーな情報の展開であるという性質は変えることができないから、それをふまえた索引作業の方に何か手だてを考える必要があるということになる。

3. 有効な索引作業方針の必要性

以上のように、索引技術上の問題は、文章の展開がリニャーなものであるということに根本の原因を求めて、consistency の保持の困難さと、潜在する大項目への目配りの困難さの二つをあげ、それが二者択一的になる性質について述べた。問題をこのように一般論としてとらえることは可能であろうが、解決方法は出来るだけ具体的であることが望ましい。しかし、同時にそれは、上記の問題の性質を充分考慮に入れたものでなければならぬ。それには、ここにやはり索引作業上の方針を立てる必要があると考えられる。

一般に現在行われている索引作成の進め方は二つあって、一つは、採録すべき項目は、とりあえず全部1項目1枚のカードなり、スリップなりに書き取って、全部書き取り終わってから、これを所定の配列基準に従って配列し、その際、同一の項目はまとめていくという方法である。もう一つは、やはり書物の前の方から順次拾っていくのだが、拾った項目をすぐに所定の配列基準の中に組み込んでいくという方法である。前者は索引と配列とを分ける方法であり、後者は索引と配列とを同時並行して行う方法である。どちらにもそれぞれの利害得失があるが、いずれにしろ、先きにあげた問題の性質を充分ふまえた方法とはなっていない。

B. 索引作成上の方針

索引作成上の問題に対応するためには、索引方針とは別に索引技術上の方針をたてる必要がある。

今回は二つの方針を立てた。一つは索引項目の選定作業にレビューのプロセスを入れること。もう一つは、書物の体系的な理解と関連づけるための操作として解析表というものの作成を試みたことである。以下、それぞれ

について述べる。

1. レビュー・プロセス

1度行った項目選定をもう1度前から見直ししてみよう。見直し作業も選定作業と同じように、文章のリニヤーナ展開という問題の制約のもとにある作業だ。しかし、consistencyを保たねばならぬという意識のもとでの作業と、保てたかどうかというチェック作業とは、同じリニヤーナフォローでも異なる。レビューはその範囲で有効である。レビューを行うことによって、すでに高頻度、広範囲で出現することがわかっている項目に対し、その拾い方がバランスを欠いていないか、バランスを欠いている場合に、さらに拾い足すのか、それとも一部を落とすのかのチェックを入れることができる。同時に、それらの出現個所のうち、その項目について最も詳しく扱っているところをチェックすることができる。あるいは、その項目にサブヘディングをつける必要があるかどうかの判断も加えることができる。

レビューを行うことによって、対象文献全体からまんべんなく（平等にということではない）項目が拾われているかどうかをチェックすることができる。前述のように、人間による索引作業の方が機械よりも更に機械的になる性質がある。それをチェックすることができる。

具体的には、まず最初の項目選定を、対象文献中のテキストから選べるものは、その横に線を入れ、テキスト中の語句に加工が必要なものはその加工したものを、欄外に書き出すことによって行った。次いで、次に述べる解析表へその索引項目を転写した。その際、書き写した索引項目には鉛筆で○印をつけた。解析表へ書き移した段階で索引項目が群としてレビューできることになったので、そこでレビューを加え、選択結果に修正を加えた。そこで残ったものにはテキスト中の項目と同様に○印を加え、次いでカードに転写していく時に、その○印を赤のボールペンでかこみ直すことによって転写済みを確認し、最後にその赤○印のついた項目をテキストにもどって確認しながら、同様に赤のボールペンでかこみ直した。テキスト中には、赤でかこめない最初の選定項目が残ったが、それは消さずにそのままにしておいた。

2. 解析表の作成

索引作業そのものは、前から1ページずつリニヤーナに進めて行かねばならぬが、文献そのものは、体系を成している。そこで、対象文献を、書名を頂点とする一つのピラミッド的な体系をなしていると仮定し、この頂点から底辺へという方向でその対象文献を1度理解し、理想

的にはそれを別の表なり、図なりに移して、そこから索引するという方法を考える。その時、ページングをどうするかは別に考える必要はあるが、これは処理できることである。つまり、人間が文献を読む場合に、リニヤーナに前から索引していくこと自体は仕方がないが、対象である文献の体系的な理解である分析表をそこへ組み合わせることによって、“前から”でなく“上から”索引していく。この、体系的な文献の理解を行った結果を解析表と呼ぶことにする。次にその内容について述べる。

C. 解析表の構造

解析表というものは、書物の体系的理解を目指す頂点からの分析であるから、書名、章名、見出し名、パラグラフという順序に降りて見ていくことになる。そして、文章と索引との対応、パラグラフと索引との対応、見出しと索引との対応、章立てと索引との対応、そして最後に、書名あるいは目次と索引との対応がそれぞれ有機的なつながりを持っているかどうか分析のポイントとなる。

これらの中で、本書の場合の重要な単位は小見出しとパラグラフである。次にその取り扱い方を示す。

1. 小見出し

小見出しは、“上から”降りて行く索引作業の場合に、最少であり、かつ、最も有効な単位である。それが各ページの中に、具体的に文章にとりかこまれて存在していることがその有効性を高めている。前から進めて来る字拾いはパラグラフを一つの単位とするから、それとうまくかみ合う位置にある。

この小見出しから索引項目がもし拾えるのであれば、先きに述べた何ページにもわたる大きな項目を見落とすという失敗を防ぐ手段にもなる。

小見出しを、そこから索引項目が拾えるかどうかにかかわらず、索引対象としてチェックするメリットはもう一つ別にある。人間の索引作業が機械的になる現象は、ページ毎に平均何項目拾うかという勘定が、知らず知らずのうちにインデクサーの頭の中で、consistencyの一部分となってしまうことにあらわれる。しかし、ページという単位は、書物の物理的エレメントであって、解析表の主旨とは似て非なるものである。小見出しのチェックは、この区別をつける作業として有効である。

2. パラグラフ

パラグラフの分布は第1表に示した。各小見出しごとの分布の一例は第2表に示した。ある語句を索引項目として採録するか否かを見定める根拠として、パラグラフ

第2表 釈迦如来像“かたち”の解析表

小見出し	1行抄録 (数字はパラグラフ番号)	索引項目 (項目の右はページ,片仮名のシは写真のページ)
仏教は初め偶像崇拜ではなかった	① 仏舎利を埋めた塔から仏教芸術が始まった	○卒塔婆 ²¹⁻² ← 塔, 塔婆 ○舎利 ²¹ ○釈迦牟尼 ^{21,22}
仏像はガンダーラで初めて発生した	① ギリシャ彫刻の影響でガンダーラにおいて仏教が偶像崇拜になった ② インダス河→全インド→中国→日本と伝わって来た ③ 塔の上の覆鉢に舎利を取めるのはどの国にも見られる ④ 仏足石は偶像化以前の原始仏教芸術の名残りである	○パールフット ²² ○本生譚 ²² ○偶像崇拜 ²³ ○ガンダーラ ²² ○ギリシャ彫刻 ²² ○サーンチー ²² ○アレクサンダー大王 ²² ○覆鉢 ²³ ○ガンダーラ ²³⁻⁴ ○仏足石 ²³ ○仏足石—薬師寺 (奈良) ²³⁻²⁴
釈迦如来像が日本で作られ始めた	① 安居院の本尊 (飛鳥大仏) が日本の代表的遺作である ② 釈迦如来像は因果経によって正しく理解される	○摩耶夫人 ²⁵ ○釈迦如来像—安居院 (奈良) ^{24,24} ○因果経 ²⁵ ○絵因果経 ²⁵ ← 因果経 ○本生譚 ²⁵⁻²⁶
釈迦の一生——本生譚——を仏像に作る	① 摩耶夫人像は釈尊の出生を像にしたものである ② 天上天下唯我独尊といった姿を釈迦誕生仏といい、その時すでに三十二相八十種好 (相好) をそなえていた	○摩耶夫人像—国立博物館 (東京) ^{25,18} ○釈迦如来像—出生 ^{25-26,18} ○釈迦如来像—誕生 ²⁶ ○相好 (三十二相八十種好) ²⁶⁻²⁷ ○釈迦如来像—誕生仏—東大寺 (奈良) ^{26,19}
三十二相八十種好を備える仏陀像	① 三十二相八十種好のうちで顕著なのは、肉髮相, 白毫相, 手足千輻輪相である ② 如来の印相は仏像を区別する手がかりとして重要である ③ 29才から6年間の苦行をあらわすのが苦行像である ④ 苦行のあと山を出る。これが出山釈迦像である ⑤ 出山のあと静観に入る。この時悪魔をしりぞけたのが降魔像, 悟りを開いてからあとは成道像となる ⑥ 成道のあと諸国を説法して歩いた。その時の姿が一般に見る釈迦如来像である ⑦ その時の釈迦如来像の印相は, 施無畏, 与願が特徴である ⑧ 手足指縵網相は手の指の間の水かきのことである	○肉髮相 ²⁷ ○白毫相 ²⁷ ○手足千輻輪相 ²⁷ ○印 ²⁷ ← 印相, 印契 ○因果経 ²⁸ ガンダーラ ²⁸ 禪 ²⁸ 苦行 ²⁷⁻²⁸ ○釈迦如来像—苦行 ²⁷⁻²⁸ ○釈迦如来像—出山 ²⁸ ○釈迦如来像—苦行—大徳寺 (京都) ^{28,28} ○釈迦如来像—降魔 ²⁸ ○釈迦如来像—成道 ²⁸ ○因果経 ^{28 (2)} ○施無畏印 ³⁰ ○与願印 ³⁰ ○釈迦如来像—室生寺 (奈良) ^{29,29} ○手足指縵網相 ³⁰ ○釈迦如来像—像容 ²⁹⁻³⁰
入涅槃—入滅—頭北面西の釈迦像	① 80才で入滅した。そこで涅槃像を作る ② 法隆寺の涅槃像が日本最古。「泣き仏」の群像にかこまれている ③ 絵画では高野山のものが制作年代もわかり、涅槃像の典型的な形式をそなえてい	○釈迦如来像—涅槃 ³⁰⁻³² ○釈迦如来像—涅槃—法隆寺 (奈良) ^{31,31} ○「泣き仏」 ³¹ ○釈迦如来像—涅槃—金剛峯寺 (和歌山) ^{31-32,45} ○「涙のシンフォニー」 ³²

読書の手段としての索引

小見出し	1行抄録(数字はパラグラフ番号)	索引項目 (項目の右はページ,片仮名のシは写真のページ)
	<p>る。「涙のシンフォニー」といわれる</p> <p>④涅槃のあと金棺から1度上半身をおこして大摩耶経を説いた</p> <p>⑤荼毘に附し、舍利を分け、塔に収めた</p> <p>⑥日本では釈迦如来像の制作は仏教伝来のあとすぐ始まった</p>	<p>○大摩耶経³² ○金棺出現図^{32,45}</p> <p>○摩耶夫人³²</p> <p>○卒塔婆³²⁻³³</p> <p>○釈迦如来像—三尊—法隆寺(奈良)^{33,17シ}</p> <p>○釈迦如来像—立像—清凉寺(京都)^{33,20シ}</p> <p>○釈迦如来像—深大寺(東京)³³</p> <p>○釈迦如来像—蟹満寺(京都)³³</p>

全体がそれを取り扱っているか否かを見ることは大切な極め手である。しかし、このことは、各パラグラフからは必ず一つは項目をあげるというような方針とは一致しない。

パラグラフに準拠して索引していく際に注意を要することが、本書の場合に3点ある。第1点は、パラグラフと小見出しとの対応関係であって、著者がウェイトをおいて書いているところは、その小見出しのもとでのパラグラフの数は多くなり、ウェイトをおかぬところは、その逆となる。索引項目の選定作業上、小見出しとパラグラフのウェイトもこれによってシフトする。

第2点は、本書の場合3人の著者がいるが、佐和、望月にくらべて梅原の文章は1パラグラフの長さが長い。(第1表参照)パラグラフを単位とする時にこの暗示にからぬよう注意する必要がある。

第3に、本書のような教養書の出版では編集上の都合でパラグラフの長さが左右されているところがある。それを索引する側でコントロールする必要があるという点である。今回の場合、二つのパラグラフを一つにすることはしたが、その逆は行わなかった。

解析表は、具体的には、テキストを読んで各小見出しの支配するパラグラフごとに、約30字前後からなる1行抄録を作って進めた。そこへテキスト中に拾ってあった索引項目を転写した。索引項目のレビューも、この小見出しと1行抄録との対応によってその有効性を吟味することが可能となった。

しかし、今回の作業では、解析表の中から索引項目が拾えるような分析はできなかった。また、解析表を図や表で表現する方法についても工夫できなかった。

V. 分析視点をめぐる索引結果

A. “かたち”と“こころ”

同じ章の中で、“かたち”について述べた部分と、“こころ”について述べた部分とに共通して出現して来る項目を書き出したのが第3表である。この表からわかることは次のとおりである。

1. 仏像の種類による両者の一致度

検討の対象となる章は、釈迦如来から禅までの12章であるが、それぞれの章に出現する全項目数との比で見ると、全体として50%から30%の一致度になっており、章別に見ると、観音菩薩像、阿弥陀如来像、諸天像、不動明王像の4章が50%のグループ、釈迦如来像、薬師如来像、大日如来像、弥勒菩薩像、普賢・文殊・虚空蔵菩薩像、地獄・極楽図、禅、地藏菩薩像の8章が30%のグループに入っている。このうちで観音菩薩像、不動明王像、諸天像の一致度が高いのは、そこに示された項目のカテゴリーとして、そこで取り扱われた仏像の種類や変化を示す項目が多いことに示されるように、それらの章では、“かたち”の著者が、ほとけの種類を説き、“こころ”の著者がその扱いに従って、“こころ”を説いたというスタイルに依るところが大きい。ところが、阿弥陀如来像の章にはそのような傾向は見られず、“極楽浄土”などをめぐって深くかみ合った論旨の展開になっていることを想像させる。

2. 議論が集中した項目

“かたち”の著者と“こころ”の著者とで、特に議論が集中した論点は、その項目に両者が言及した回数に対応の様子で知ることができる。さきの、阿弥陀如来像のところの“極楽浄土”を始め、観音菩薩像の章における“十一面観音像”をめぐる記述、諸天像の章における“四天王像”、薬師如来と釈迦如来との関係、大日如来像と不動明王像を論ずる時に密教を引き合いに出す語り口などに、同じ傾向を見て取ることができる。なお、薬師如来像の章における“現世利益”の項目のように、“かた

第3表 “かたち”と“ところ”に共通する索引項目

(括弧内の数字は、前が共通項目の出現回数、後がその章全体の項目出現回数である)

釈迦如来像 (30/96)	(かたち：ところ)
---------------	-----------

ガンダーラ	3:2
印	1:2
金棺出現図	1:1
苦行	1:2
摩耶夫人	2:1
“涙のシンフォニー”	1:1
施無畏印	1:3
相好	1:1
与願印	1:3
禅	1:1

薬師如来像 (36/125)

現世利益	1:6
神/仏	1:1
貴族	1:1
空海 (弘法大師)	1:1
最澄 (伝教大師)	1:1
死	1:1
大衆	4:1
天台宗	1:1
阿弥陀如来像	2:4
釈迦如来像	3:3

阿弥陀如来像 (61/121)

阿弥陀堂	2:1
源信「往生要集」	1:1
極楽浄土	6:7
早来迎図	1:1
彼岸	1:3
印	1:1
浄土教	2:1
常行三昧	1:1
観無量寿経	2:4
観音・勢至両菩薩	2:2
貴族	1:1

九品	1:1
念仏	1:1
念仏行者	1:1
来迎図 (阿弥陀)	1:1
立像	1:1
勢至菩薩像	2:1
釈迦如来像	1:2
坐像	1:1
大日如来像 (57/153)	
阿弥陀如来像	2:3
大乘仏教	1:1
大日教	1:2
十三仏	2:1
華嚴経	1:2
金剛頂経	1:1
空海 (弘法大師)	2:1
曼荼羅一金剛界	1:2
曼荼羅一胎蔵界	2:3
密教	3:3
盧遮那仏	2:2
両界曼荼羅	1:3
釈迦如来像	4:1
真言密教	1:4
胎蔵図像	1:1
薬師如来	1:1
観音菩薩像 (66/114)	
菩薩像	2:2
大乘仏教	1:1
現世利益	2:1
法華経普門院	2:1
十一面観音像	4:4
十一面観音像—大笑面	1:1
十一面観音像—白牙面	1:1
十一面観音像—忿怒面	1:1
十一面観音像—慈悲面	1:1
観音菩薩像—馬頭	3:2
観音菩薩像—不空罽索	2:2
観音菩薩像—准胝	2:1
観音菩薩像—如意輪	2:2
観音菩薩像—聖	2:1

読書的手段としての索引

観音菩薩像一千手	2:2	不動明王像 (63/139)	
観音霊場	1:1		
観音信仰	1:1	愛染明王	2:1
密教	2:1	赤不動尊	2:1
如来像	2:1	青不動尊	2:1
三十三身	1:1	菩薩像	4:2
多面多臂	1:2	大日如来像	3:3
		円珍 (智証大師)	2:1
地藏菩薩像 (21/73)		役小角	1:1
		玄朝	1:1
阿弥陀如来像	1:1	降三世明王	2:1
大地母神	1:1	軍荼利明王	2:1
現世利益	2:1	快慶	2:1
地獄界	2:3	黄不動尊	3:2
観音菩薩像	1:1	金剛夜叉明王	2:1
子供	2:2	孔雀明王	1:1
声聞形	2:1	空海 (弘法大師)	3:1
		密教	3:3
弥勒菩薩像 (30/108)		如来像	1:2
		良秀	1:2
阿弥陀如来像	2:2		
藤原道長	1:2	諸天像 (63/125)	
極楽浄土	1:1		
半跏思惟像	2:2	弁財天	3:2
法華経	1:1	毘沙門天	5:2
観音菩薩像一如意輪	1:1	梵天	2:2
経塚	1:1	菩薩像	1:2
未来仏	1:1	バラモン教	1:3
弥勒浄土教	1:1	大黒天	1:3
六道輪廻	1:1	恵比寿	1:1
釈迦如来像	2:3	福祿寿	1:1
		布袋	1:1
普賢・文殊・虚空蔵菩薩 (28/91)		ユーモア	1:1
		異教	1:1
円仁 (慈覚大師)	1:1	歓喜天	1:1
五台山	1:1	吉祥天	1:2
観音菩薩像	1:1	金剛力士像	1:1
空海	3:1	三面大黒天像	1:2
脇侍	2:1	七福神	1:1
釈迦如来像	2:1	四天王像	4:4
獅子 (乗りもの)	5:1	“聖天様”	1:1
象 (乗りもの)	5:1	帝釈天	3:1

地獄・極楽図 (34/104)		“ ”	弥勒菩薩像	2 : 3
		釈迦如来像	普賢・文殊・虚空像菩薩像	2 : 1
阿弥陀如来像	4 : 2	“ ”	地獄・極楽図	1 : 1
阿修羅	1 : 2	阿弥陀如来像	薬師如来像	2 : 4
畜生界	3 : 1	“ ”	大日如来像	2 : 3
餓鬼	2 : 1	“ ”	地藏菩薩像	1 : 1
源信「往生要集」	1 : 2	“ ”	弥勒菩薩像	2 : 2
五衰	1 : 1	“ ”	地獄・極楽図	4 : 2
十界	1 : 1	空海 (弘法大師)	薬師如来像	1 : 1
六道	1 : 2	“ ”	大日如来像	2 : 1
釈迦如来像	1 : 1	“ ”	普賢・文殊・虚空蔵菩薩像	3 : 1
四大苦	1 : 2	“ ”	不動明王像	3 : 1
修羅界	2 : 1	菩薩像	観音菩薩像	2 : 2
禅——達磨像 (26/73)		“ ”	不動明王像	4 : 2
		“ ”	諸天像	1 : 2
現代芸術	2 : 1	密教	大日如来像	3 : 3
白隠禅師	1 : 2	“ ”	観音菩薩像	2 : 1
十牛図頌	1 : 3	“ ”	不動明王像	3 : 3
「面壁達磨」	2 : 1	大乘仏教	大日如来像	1 : 1
「芦葉達磨」	2 : 1	“ ”	観音菩薩像	1 : 1
最澄 (伝教大師)	1 : 1	現世利益	薬師如来像	1 : 6
雪舟	1 : 1	“ ”	観音菩薩像	2 : 1
墨絵	1 : 1	“ ”	地藏菩薩像	2 : 1
丹霞天然	1 : 1	源信「往生要集」	阿弥陀如来像	1 : 1
天台宗	1 : 1	“ ”	地獄・極楽図	1 : 2
		極楽浄土	阿弥陀如来像	6 : 7
		“ ”	弥勒菩薩像	1 : 1
		印	釈迦如来像	1 : 2
		“ ”	阿弥陀如来像	1 : 1
		貴族	薬師如来像	1 : 1
		“ ”	阿弥陀如来像	1 : 1

ち”の著者が簡単にふれた点を“ころ”の著者は重視して論じたことを想像させるように、両者で一致しながら、ウェイトの置き方はやや差があると思われる項目は随所に認められる。しかし、2人の著者の言及回数が2回かそれ以上であることを示す項目、(2:2以上)は、その章で本書の主旨にそって扱われた重要な項目である、と判断することができよう。

3. 複数の章にまたがる一致

“かたち”の著者と“ころ”の著者との議論がかみ合ったことを示す項目の一致が、複数の章にわたっているものをリストすると次のようになる。

第4表 複数の章にわたって一致する項目

項目名	一致の見られる章	対応関係
釈迦如来像	薬師如来像	3 : 3
“ ”	阿弥陀如来像	1 : 2
“ ”	大日如来像	4 : 1

ここに示された11の項目が本書において、“かたち”と“ころ”の組み合わせ上、大切な役割りを果たしたものであることは確かである。それと同時に、これらの項目がいろいろの章で“かたち”と“ころ”をめぐる論じられている言及回数もまた、第3表に見られるものよりも、一般的にいって、多いという点も注目すべきである。

なお、第3表にリストした160項目は、これら対応関係で示した出現以外にも、それぞれの著者によって、個別に各章において言及されている項目であることはいうまでもない。

読書的手段としての索引

B. 著者別の特徴

前項では、“かたち”の著者と“こころ”の著者で、各章ごとに、あるいはいくつかの章にわたって、論点がかみ合った項目を中心に見た。今度は逆に、この両方の著者がかみ合ぬままになっている項目を見て、そこから何がわかるか検討する。“かたち”の著者と“こころ”の著者とでそれぞれの特徴が出ている項目を、2回以上出現しているものについてリストしてみると第5表のようになる。なお、2回以上出現していても、ここでの検討の対象になり得ないもの、また、“かたち”を記述した部分における仏像の名称等は、それが“かたち”の著者の方へ偏るのは当然なので省略した。

第5表 “心”と“形”の著者別に特化した項目名リスト

- 出現回数2回以上のものから選択した
 - 仏像の呼称およびイコノグラフィー関係の用語はおとした
 - ローマ字のA-Z順配列にした
 - (佐)、(望)はそれぞれ佐和、望月を示す
 - 下線は全ページがその項目の詳論であることを示す
1. “心”に特化した項目
- | | |
|------------|--|
| 別尊雑記(佐) | 上67, 167 下84 |
| 大日経疏(佐) | 下52, 77, 81, 126 |
| 陀羅尼集経(佐) | 上157, 171, 173, 下114 |
| 儀軌(佐) | 上61, 62, 63, 64, 130, 168, 173, 175
下57, 58, 72, 78, 79, 80, 84, 130, 131 |
| “(望) | 下23, 24 |
| ヒンズー教(佐) | 上60, 155, 156, 158, 177-8
下69, 70, 89, 126, 128 |
| 「覚禅抄」(佐) | 上61, 67, 130 下84, 128 |
| 金剛頂経(佐) | 上61, 67, 130 下84, 90 |
| 金光明最勝王経(佐) | 下124, 125, 127 |
| ラマ教(佐) | 下63, 78, 89, 121 |
| 曼荼羅(各論)(佐) | 上66, 135 下69, 85 |
| “(望) | 上96-7 下160, 162 |
| 仁王経(佐) | 下72, 77, 79 |
| 真言宗 | 上122, 124, 129 下72, 80, 83, 129 |
2. “形”に特化した項目
- | | |
|--------|--------------------------------|
| アポロ的精神 | 下92-3, 95, 103-4 |
| 美人 | 下136, 173 |
| 微笑 | 上9-10, 37, 40-4 下31, 44 |
| バラモン教 | 下92, 130, 135, 141, 218 (佐105) |

- | | |
|-----------|---|
| キリスト | 上44, 45, 46, 140, 180 下32-3 |
| キリスト教 | 上40, 44-8, 103, 111, 113, 149
下43-4, 65, 224, 225 |
| デモステネス | 上40-1, 43, 182 |
| ディオニソス精神 | 上113 下92-3, 95, 103-4 |
| ヨーロッパ | 上9, 12, 40, 43, 47, 77, 78, 103, 111, 136, 150, 151
下34, 44, 64, 67, 102, 207, 208, 209, 225 |
| 不死 | 上100, 102, 109, 110 |
| ギリシャ彫刻 | 上34, 40, 41, 141, 182, 183(望22) |
| ヘーゲル | 上12, 43 |
| 比喩 | 上147, 149-50 下174, 203 |
| 法然 | 上75, 111, 113 下36, 37, 38, 163, 219 |
| Jehovah | 上145, 149 |
| 慈悲 | 上9, 36, 39, 111, 151, 180-1, 184-5, 190
下31, 44, 64-5, 91, 102, 206 |
| 定善/散善 | 上105, 108, 110, 111, 112 |
| 神 | 上100, 103, 110, 115, 144, 146 下106, 224 |
| 観音経 | 上186-7, 188, 189, 190 |
| 祈祷 | 下96, 177, 209 |
| ライプニッツ | 上138, 139 |
| 曼荼羅(一般) | 上70, 142, 144-5, 150 下140, 217-26 |
| マリヤ | 上44, 140 |
| マルクス | 下35, 44, 139, 226 |
| 南無阿弥陀仏 | 上76, 108, 111, 112 下36 |
| 日蓮 | 上73, 74, 77-8, 148 下36, 37, 66, 97, 219 |
| ニーチェ | 上47, 150 下92, 93, 139, 144 |
| 農耕文化 | 上192, 222-3 |
| パスカル | 上138 下174 |
| ブラグマチズム | 上70, 74 |
| リード | 上43-4, 110 |
| ショーペンハウエル | 下136, 169 |
| 生/死 | 上38, 212-3, 215 下219 |
| 死 | 上44-5, 46, 47, 48, 109, 110, 115, 175, 209 (佐49-50)
下173 |
| 神仏習合 | 上71, 148 下94 |
| 新興宗教 | 上77-8 下42 |
| 親鸞 | 上74, 75, 76, 104, 111, 112-3, 148 下36, 37, 66, 163 |
| 神道 | 上74, 148 下100, 175 |
| ソクラテス | 上47, 113 |
| トインビー | 上40 下44, 226 |
| 笑い | 上41-2, 42-3, 141 |
| 和讃 | 上76, 216-23 |

第5表から推論されることは次のとおりである。まず“かたち”の著者から。

1. 佐和への偏り

“かたち”の著者は佐和、望月の2人であるが、項目から見て“こころ”の著者と組み合わせるのは望月で、佐和がかみ合っていないことがわかる。これは、密教に依る佐和の記述に対して梅原は別の用語を用いて“こころ”を語ったのに対し、主として浄土教による望月の記述に対しては、梅原は望月の用語に従って“こころ”を語ったのではないかということ推量させる。これは本書のかくれた内容をうかがわせる面白い視点で今後更に調べてみたい。

2. イコノグラフィーのドキュメンテーション

“別尊雑記”、“覚禅抄”、“儀軌”など儀軌類の項目、“大日経流”、“陀羅尼集経”等の経典類の項目が目立つのは、“かたち”の著者のドキュメンテーション指向を示すものである。なお、本書中で取り上げられている経典類の種類は多数にのぼるが、その大半は項目として1回出現するものであり、ここには主なもののみあげた。“ヒンズー教”、“ラマ教”のような項目もイコノグラフィーを説く文脈において用いられていることをうかがわせる。

3. 項目“曼荼羅”の特徴

第5表から直接推論することは困難があるが、“曼荼羅”という項目は、“こころ”の著者梅原は本文中において曼荼羅の種類を問わずただ曼荼羅とのみ用い、反対に“かたち”の著者達は、曼荼羅一般でなく、金剛界曼荼羅、胎藏界曼荼羅、両界曼荼羅等を用いている。その差が出ている。こうした抽象レベルの差という分析視点も、もう一つ存在することをこの項目はうかがわせる。

次に“こころ”の著者梅原のタームを見てみよう。

4. 比較対象としてのヨーロッパ

梅原の項目で最も特徴的なのは、西欧起原の用語の多いことである。それは“ヨーロッパ”の項目に象徴的に示されている。

5. 比較宗教的アプローチ

比較の主たる対象はキリスト教である。それは“キリスト”、“キリスト教”等の項目の出現回数とバラツキに示される。しかし、“神”の概念を媒介にして“神道”、“神仏習合”など日本との比較も加わる。

6. 西欧学者からの引用

“ニーチェ”、“マルクス”などの哲学者を始め、ヨーロッパの歴史家、美学者の説を引用しながら“こころ”を語るという傾向が見られる。

7. 比較文化的アプローチ

比較の主たる対象はギリシャ文化である。仏教を宗教としてキリスト教と比較する軸と同時に、仏教を文化としてギリシャ文化と対応せしめている。それがギリシャ関係の項目を越えて、“不死”、“生/死”、“死”、“微笑”、“笑い”、“慈悲”などに示されている。

8. 宗教用語に見られる特徴

“定善/散善”、“祈祷”、“和讃”など、梅原が主として用いた仏教用語があり、また“観音経”は“かたち”の著者達は言及していない。“こころ”の著者が“かたち”の著者達の用語にこだわらずに自分の論旨を展開したことをうかがわせている。(III-C参照)

9. 僧侶

“法然”、“親鸞”、“日蓮”の三者を梅原は宗祖として示すことによって、その宗派の内容を示すという語り口を用いている。これはこの“こころ”の著者の語の用い方の特徴を示している。

10. 梅原用語

単に僧侶名ばかりでなく“南無阿彌陀仏”、“美人”などに梅原ボキャブラリーの一部がのぞいている。これは、出現頻度1回の語群の中に数多く見られることである。

11. 二元論的視点

特定の項目を離れて全体的に“こころ”の著者の項目を見てみると、そこに二元論的アプローチの多用が見られる。“日本および東洋と西欧”、“ヘレニズムとヘブライズム”、“アポロ精神とディオニソス精神”、“生と死”など。これは“かたち”の著者達には見られない思考パターンであることをうかがわせる。

C. ほとけどうしの相互関係

ほとけどうしのあいだがらを示すために、釈迦如来像から曼荼羅まで、13の章の章名としてあげられた各ほとけ(“地獄・極楽”と“曼荼羅”と“禪”は仏ではないが、それに準ずる扱いをした)の名称そのものが項目名となっているものに対して、その仏を直接扱った以外の章での出現状況を調べた。それが第6表である。

この表を見て読み取れることは以下のとおりである。

1. 釈迦如来のことを説明するのに、他のほとけは不要である。しかし、このことは、釈迦如来を扱った章が最初の章であることも考慮に入れる必要がある。一方、釈迦如来はすべてのほとけの説明に使用されている。
2. 薬師如来、阿弥陀如来は、それぞれ如来と菩薩の範囲で説明される。一方、薬師如来と異なって、阿弥陀如来もすべての仏の説明に使用される傾向があるが、特

索引項目名 (数字は出現回数)	巻 章 ページ	上 巻					
		仏像の心	釈迦如来	薬師如来	阿弥陀如来	大日如来	観音菩薩
		7-15	21-48	49-80	81-115	117-152	153-192
釈迦如来像 39	11	(17-48)	形52, 58, 59, 60 心70-1,74,78	形83,98 心102,110	形117,121, 130,134 心135,143	形153	
薬師如来像 7			(49-80)	心102,110	形117 心135		
阿弥陀如来像 35	11		形49,65 心70,71,74, 75,78	(81-115)	形117,132 心135,143, 151	形154,155, 156,169	
大日如来像 19			心70-1,78	心102,110 112	(117-52)	心191	
観音菩薩像 15			形49,50	形94,97 心112	心135	(153-92)	
地藏菩薩像 7					形129 心135	形168	
弥勒菩薩像 9	9		心75	心112	心151		
普賢菩薩像等 2					心143		
不動明王像 8					心141,143, 154	形176	
諸天像 7					心143,144	158,169	
地獄・極楽 10					心145		
禅一達磨 2						心188	
曼荼羅 35			形50,66 心70	形96-7	形120-1.131, 133 心135,140, 142,143,144 -5,149,150, 151	形158,171 心181	

に、浄土思想との関連が強いことがわかる。同じ傾向は観音菩薩についてもいえる。

3. 大日如来は他のすべての仏との関連で説明するのがよい。
4. 菩薩は如来との関連で説明される。
5. 不動明王は大日如来との関連で説明される。
6. 禅を説明するのにも釈迦如来と同様、他の仏を必要

としないが、一方、禅が他の仏の説明にも使われていないことから、本書における禅の取り扱いは、“こころ”も“かたち”も他の章とは異なった視点からの記述である可能性がある。

7. 曼荼羅は、大日如来、諸菩薩、不動など密教的なほとけとの関連の強さが見える。

D. 仏像事例

の相互関係

地蔵菩薩	下 卷						
	弥勒菩薩	普賢菩薩等	不動明王	諸天像	地獄・極楽	禪・達磨	曼荼羅
193-223	11-44	49-67	69-104	105-144	149-179	185-216	217-226
心203-4	形13, 23 心31, 33, 36	形50, 63 心64	形69	形107-8, 115, 118	形162 心165		217, 218, 219, 220, 221
心217, 220, 221							
形203, 207 心211	形12, 26-7 心32, 38-9	心64	心102		形160, 161, 162, 163 心170, 178		217, 220, 221
		形51-2, 53	形70, 77 心85, 97, 98, 101				217, 218, 219, 220, 221
形195 心209-10		形50 心60	心102	心130	形161		220, 221
(193-213)	心36	形51, 52					220
形203-4	(11-44)	形50			心178		220, 222
		(49-67)					220
		心57	(69-104)	心130			220, 221
			形80, 86	(105-44)	形155		212, 214, 220
形195, 207 心211, 212, 216-7				心144	(149-79)		
						(185-216)	220
		形49, 51, 52, 53, 54-5, 59, 62, 63 心64	形66, 69, 72, 77, 78, 85	形140	形160, 162		(217-26)

本書には前述のとおり、写真と図が合せて129枚使用されている。本文の中には、写真はないが、所蔵寺院等を示した仏像事例も多数ある。それらの中から、写真に取り上げられたものはすべて、その他本文中で、日本最古のものであるとか、美術的にすぐれているとして特筆されているものを加えて別にリストを作った。これは利用の便を考えて、北は青森の恐山から南は大分県の富貴

寺に至る地理区分に従って並べた。大部分は京都(58点)と奈良(43点)に所在する。

次に奈良県の部分のリストを第7表に示す。

VI. 結論—読書の手段としての索引—

以上の索引作業の経験から、初めにあげた読書の手段としての索引の四つの問題に対してどのようなことが結

第7表 所蔵寺院別仏像名リスト

安居院 (奈良)	釈迦如来像	上24, 24 [°]		
中宮寺 (奈良)	弥勒菩薩像	下16 [°] , 21, 41		
達磨寺 (奈良)	達磨像	下181 [°] , 189		
法華寺 (奈良)	阿弥陀如来像	上84-5		
法隆寺 (奈良)	釈迦如来像-三尊	上17 [°] , 33		
"	"	釈迦如来像-涅槃	上30-31, 31 [°]	
"	"	阿弥陀如来像	上82, 84, 89 [°]	
"	"	観音菩薩像	上160, 160 [°] , 165, 166, 178	
"	"	百済観音	上160 [°] , 178	
"	"	夢違観音	上161 [°] , 165, 178	
"	"	弥勒菩薩像	下14, 18 [°]	
"	"	普賢菩薩像	下55, 59	
"	"	文殊菩薩像	下55	
"	"	四天王像	下107-8, 107-8 [°]	
"	"	仁王像	下117, 117 [°]	
法輪寺 (奈良)	薬師如来像	上51-2, 53 [°]		
金峯山 (奈良)	経塚	下29, 30 [°] , 38		
興福寺 (奈良)	薬師如来像	上 57		
"	"	十二神将像	上55 [°] , 59, 60 [°]	
明王院 (奈良)	不動明王像	下75 [°] , 80		
文殊院 (奈良)	文殊菩薩像	下46 [°] , 62		
室生寺 (奈良)	釈迦如来像	上29, 29 [°]		
新薬師寺 (奈良)	薬師如来像-坐像	上63, 63 [°]		
"	"	"	" -立像	上58, 58 [°]
"	"	准胝観音像	上175, 175 [°]	
"	"	十二神将像	上59	
当麻寺 (奈良)	弥勒菩薩像	下25, 25 [°]		
"	"	広目天像	下109 [°] , 113	
"	"	当麻曼荼羅	上96-7	
東大寺 (奈良)	盧遮那仏	上96-7		
"	"	釈迦如来像-誕生仏	上19 [°] , 26	
"	"	大日如来像	上137	
"	"	不空罽索観音	上160, 170 [°] , 178	
"	"	弥勒菩薩像	下25, 30 [°]	
"	"	吉祥天像	下123, 124 [°]	
唐招提寺 (奈良)	盧遮那仏	上118, 127 [°]		
"	"	薬師如来像	上58	
薬師寺 (奈良)	仏足石	上23-24		
"	"	薬師如来像	上52, 54 [°]	
"	"	聖観音像	上105, 166 [°] , 178	

果としていえるかを次に示す。それは、4点にまとめることができる。

A. 索引方針の手段化

初めに、読書の手段としての索引は、発見であるか検証であるかという問題があった。結論的にいえば、検証は先で、発見は後だという前後関係になると考えられる。索引作業は、少なくとも一読してわかりかけていることを実証してみるということではなければ、索引方針は立てられず、索引方針のない索引作業は労力の無駄になる。従って、まず検証の手段として索引を行ってみる。しかし、その結果、検証しようと思っていたことが正しく検証されることもあるが、検証しようとしていた問題の設定が間違っていたことがわかったり、新しい問題が設定されたりもする。いずれの場合も、それらは新しい索引方針となるべきものである。検証は、索引方針を手段化して精密なものにしていく過程で、新しい問題発見の道具となることができるようになると思われる。

B. 索引作業の方針設定の重要性

読書の手段としての索引は、対象文献を内容的に読みこなすための索引方針の吟味と並んで、テクニカルに対象文献を読みこなすための索引作業上の方針を、どう設定するかで大きく左右されると思われる。今回の作業で、解析表を作って、体系的理解と索引項目選定のレビュー・プロセスを組み合わせる試みをしたが、なお充分でない。手段としての索引の吟味が、常に読書対象文献からは切り離して行われる必要がある。

C. ワードとコンセプト

語彙のピックアップをしているうちに意味取り作業を忘れるという字拾いと意味取りの乖離は、今回の作業で確認はできたが、解決策は見付からなかった。これは、索引方針や索引作業の方針によっては解決のつかぬ言語学的な問題、いいかえれば、文字によるワードと、その指し示すコンセプトの問題であろう。本書の場合に、写真ページを持つことが、索引作業にどのような補いになっているかというポイントはあるが、分析の対象とはしなかった。これは文字情報の問題、意味論の問題として、別個の取り扱いを要する問題であるように思われる。

D. 読解のプロセスとしての索引

範囲の設定として、読解のプロセスとして索引を見るということは、結論的には正しいように思われる。しかし、索引作業を読解のプロセスとしてみることは、手段として索引の吟味をすることが目的だとする視点の設定

とはやや矛盾するところがあることがわかった。読解のプロセスとしての索引が効果をあげるためにも、手段としての索引手法の吟味が、対象にふさわしい、しかも、それ自身対象から離れて、その有効性を検討できる索引作業の方針設定というかたちで行われる必要があると思う。

VII. あとがき

読書の手段としての索引という研究テーマを、自分の読書とからめて個人が研究する場合に、次の三つの領域があると思う。

1. 索引のない、ある文献に対し、実際索引を作ってみて、その結果がその文献の理解にどう影響するかを自己分析してみる。
 2. 巻末に内容索引がすでについている文献に対し、その索引を見ない前に自分で索引してみて、その結果を前からその文献についていた索引と比較してみる。
 3. 巻末に内容索引がすでについている文献のユーザーになって、その索引の全項目についてテキストとの対応関係を分析してみる。
- 今回は、この最初のアプローチを取ったささやかな試みであった。ご批判をいただきたい。